

東洋史

岡 元司

東洋史からは、山根直生氏が「唐末における藩鎮体制の変容―淮南節度使を事例として」という題で発表をおこなった。当日の発表を要約すれば、以下のようになる。

山根氏は共通テーマである「傭兵」を、中国史においては「募兵」に注目することで論を出発させ、募兵が中国社会で最も大きく広がった唐代後半についての考察をおこなった。すなわち、唐代後半は藩鎮制度が展開し、兵士が專業化した時期であり、そのことは、軍事費増大による国家財政の構造的変容をはじめ、多方面に影響を及ぼした。この藩鎮制度の研究では、一九八〇年代以降、各藩鎮の差異が分析される中で、中央権力への依存度の高い藩鎮の存在が再確認されているが、そうだとするならば、唐朝の崩壊や唐末五代の各地域における政治権力の分立という歴史的事実は、あらためてどう説明すればよいかとの問題提起を山根氏はおこなう。氏は、藩鎮が基盤としていた社会的階層を、流通経済に着目して、広域商人、地域内流通業者、地域内の郷村民などに分類するという分析枠組みを

提示し、長江と大運河の交差する交通の要衝である淮南節度使を考察対象とする理由をそこに結びつけた。

山根氏は、実証部分に入ると、まず、唐末の淮南節度使の藩帥である高駢の統治下とその周辺存在を、①北辺・西辺で非漢人社会との戦闘に従事してきた高駢の血族、元従部曲・旧来部將、②帰服したもと黄巢軍將(以上の①②が淮南における傭兵)、③楊行密などの在地出身者、④呂用之ら「妖人の党」に分類した。そして全体的な流れとしては、淮南藩鎮において「在地出身者への全面交代」の過程が八八〇〜八九二年の間に進化したとする。

その具体的過程とは、まず、高駢の淮南赴任以後、八八〇年までの時期が、高駢統治による唐朝の支配再建が推進された時期であり、大商人・外国商人の保護、鹽監・巡院の包摂、黄巢包圍陣の形成がなされ、高駢と個人的紐帯を結んだ旧来部將らによって統括されていたとする。続く八八七年までの時期は「妖人」呂用之らが登用された時期であるが、これについて山根氏は、「広陵妖乱志」などの史料の分析から、呂用之らが地域内流通業者としての性格を兼備していたことを重視し、彼らによる揚州の社会経済に対する強圧的統制が、かような性格をもった「妖人」らによる大商人・外国商人の弾圧・放逐をその実態としていたのではないかと述べる。一方、この時期は、「傭兵」的存在である旧来部將やもと黄巢軍將の派遣による州県統制が、活発化する自衛団などの在地勢力を抑えられなくなった時期でもあった。こうした中で最後の段階として、八九二年に楊行密が孫儒に勝利して淮南新体制を確立するが、楊行密の場合には、親衛部將を派遣して統率する形式に拠る一方で、自衛団の指導者を幕僚として取り上げ、領域の民間社会経済の発達を視野に入れた政策を採るなど、五代十国時代へとつながる楊行密の画期性を見

出している。

このような過程を通して、山根氏は、傭兵的存在である募兵が、唐末五代に大きく後退したと述べつつも、同時にそれが即座に消滅はせず、楊行密の親衛軍たる黒雲都などのように各政治勢力の中核兵団となり、勢力を増大・維持していった在地自衛団との役割分担を遂げたと位置づける。ただし、宋代まで連続する「隙面」によって、社会との断絶は深まり、宋代禁軍と鄉村社会の断絶や、中国史に後々まで痕跡を残す兵士職業観とも連関性のあることを示唆して、氏は発表を締めくくった。

以上が山根氏の発表の論旨であるが、当日の会場では、その前後の時代とのつながりについて補足説明がおこなわれた。魏晉南北朝時代軍制史の専門家である小尾孟夫氏からは、長期の中国軍制史の中で、統一期に徴兵制、分裂期に募兵制が表れることに関連づけて、秦漢時代の徴兵制、三国時代から南朝半ば頃までの兵戸制、そして北朝、隋唐の府兵制への流れについての解説がおこなわれた。また、宋代史の岡元司からは、宋代の禁軍・廂軍についての説明が加えられた。

山根氏の発表内容に対する個別質問としては、まず、山根氏が用いた「桂苑筆耕集」、「広陵妖乱志」の史料の性質についての確認と、この発表のオリジナリティが何かという確認がなされた。後者の質問に対して山根氏は、呂用之の位置づけ方が伊藤宏明論文とは異なっている点なども含め、唐朝財政構造の再生、あるいはそこからの脱却、そして自衛団の包摂などの視点を提示した点が、淮南藩鎮についての他の論文との違いであると答えた。また、「中国の傭兵集団の中国の特色とは何か」との質問に対しては、五代・宋にいたって兵士が顔面に入れ墨をされ、逃亡が防止された点を山根氏は挙げ

た。

もう一つは、小尾孟夫氏から、「本発表で傭兵を藩鎮のどこに見出しているのか」との質問が出された。これに関しては、残念ながら回答の機会・時間が当日なかったが、この質問は、山根氏が発表の中で、傭兵的存在として、高駢の旧来部将やもと黄巢軍將などを挙げていたのに対し、藩鎮における「傭兵」を取り上げるならば、本来的には、親衛軍や牙中軍・牙外軍といったものをまずは問題にすべきだつたのではないかと小尾氏の疑問によるものである。

全体討論では、議長団の寺地遵氏から歴史における傭兵について取り上げる視角として五点が示されたが、ここでは山根氏の発表内容に関わる討論について触れておきたい。まず、寺地氏が第四の問題として提示したことで、傭兵が当該社会においてどのように位置づけられていたか、とくに、一般社会との乖離性・隔絶性についてである。山根氏は、そうした乖離・隔絶が唐宋五代に関しては明確ではなく、宋代に明確になったとして、禁軍の兵士に入れ墨がなされること等を例として挙げた。

また寺地氏の示した第三の問題、すなわち傭兵がどのような歴史の変動を生み、あるいは促進したのか、という点に関して、山根氏は、唐代には労働力供出や兵役が存在していたのに対し、傭兵の導入によってそれがなくなっていくことを指摘した。

以上が当日の山根発表に関する主な討論内容であるが、最後に感想を少し述べておきたい。山根氏のおこなった実証そのものにしてほつて言えば、たとえば、「妖人」主導による揚州社会経済の強圧的統制の部分などについては、もう少し裏付けを必要とするように思われるものの、そのあたりさえクリアされるならば、流通経済の諸次元と関連させた視角で傭兵や自衛団を位置づけ、そこに表れた傭

兵の限界性を指摘するなど、興味深い論点を含んでいたように思う。国家史・制度史としてではなく、近年の中国史研究において、基層社会のあり方への関心が高まっている中、小説史料を援用した手法ともあわせて、更に今後の展開が期待できるように思う。

ただし、それだけに、とくに全体展望とのつながりでは、いくつかの不満も感じた。まず、唐宋五代史研究の中での研究史整理に関して、本来は山根氏に大きく関わってくるであろうはずの佐竹靖彦氏の研究との関係が、少なくとも当日の発表において、明確にはされていないかつた。

また、小尾氏の質問からも窺えるように、シンポジウムの主題である「傭兵」の概念が、結局、発表から討論の最後まで、山根氏においては、曖昧なままに語られていたように思う。山根氏は軍制史の全体的枠組みとして菊池英夫氏の論文を挙げ、徵兵・傭兵など二元的兵制分析概念を批判している点を冒頭で紹介したが、山根氏の菊池論文理解がそこにとどまり、菊池氏が、むしろ徵兵・傭兵が「相互媒介的に発展している」とし、さらに兵農分離の完成後もさまざまな障碍から現実には世襲的職業傭兵軍隊が登場するといった本シンポジウムも関わる指摘をしている点などは見落としていたように思われる。山根氏は、中国の特色として入れ墨を強調したが、そうした五代・宋に限定的な特色だけではなく、元・明・清（たとえば、明代世襲軍戸についての専著も既に公刊されている）も踏まえて議論を組み立てたほうが、せっかく山根氏がおこなった実証の意義も、広がりをもつたのではないかと思う。

議長団の寺地氏は、シンポジウム全体を振り返って最後に、「従来語られることのなかった一般社会との隔離・隔絶、あるいは被差別性のもっている意味合いを掘り起こしたという成果はあったので

はないか」と述べた。この問題は、たとえば、軍民の断絶性を強調した雷海宗氏に対し、フィリップ・キューン氏による批判がかつてなされるなど、国際的な中国史研究の中でも論争的関心の高い問題の一つである。本シンポジウムをよき契機として、山根氏が、中国史の特色についての追究ともかわるころうした重要な問題を、更に深めて行かれることを期待したい。